古本屋

中本祐子

旦那さんの本でも子供の本でも勝手に売ってはだめ
本にはその人の魂がついているからね
そういってニヤッと笑った古本屋の女主人

久しぶりに行った駅裏の古本屋で
二十年前に交わした会話が急に蘇った

夫が放出した専門書も、息子が置いていった本も
ギラギラした魂は抜けて
洗いさらしたタオルのように清潔だ

紐をかけてゴミの日に捨てに行くか
メルカリに魂0円で売り出すか
生殺与奪は私の手の中に、なんてつぶやいてみるが

もういいんだよ
何も考えなくていいんだよ
祭りの季節は終わったのだから
さっさと売っておしまい
そこに在った魂は買われてこその新たな命
並べられた本の隙間から声が聞こえたような気がした

2024・9・03